

原 著

保育所における「おもちゃ」の意義に関する研究 —対象乳幼児の年齢とおもちゃの形状からの検討—

上村 眞生

<要 旨>

子どもが楽しむためにだけ存在する「おもちゃ」。教育のため子どもに与える「おもちゃ」。様々な「おもちゃ」が存在する中で、おもちゃに意図的に教育性を持たせることを良しとはしない風評がある。

本研究では、このような中、おもちゃに対して保育士がどのような意識をもっているかについて明らかにした。

その結果、対象とする子どもの年齢が低い程、身体的な発達を促すようなおもちゃを、年齢が高くなると象徴的なあそびを促すようなおもちゃを提供していることが分かった。つまり、保育士は子どもの成長発達を促進する意図を持って、子どもにおもちゃを提供しているといえる。また、その中で、同じおもちゃでも様々なバリエーションのものを作成し、子どもがおもちゃ自体を楽しめるようにも配慮がなされていた。

キーワード：おもちゃ・子ども・保育士・保育所・環境

緒 言

おもちゃ

—(「お玩(もちあそび)」から)子供が持って遊ぶ道具。かんぐ。¹⁾

この語源を辿るまでもなく、おもちゃとは、その発生から常に子どもを対象とするものであったことは想像に難くない。現代においても、常に子どもの傍らに存在し、生活の中で多くの時間を共有する具体物であるといえる。その中でおもちゃの持つ教育性について、敢えて倉橋²⁾の言葉を借りれば、「すなはち、玩具は徹頭徹尾教具ではない。おのづからに種々の教育的効果を齎すことが常であり、それがまた極めて望ましいことであるにしても、それは結果であつて目的ではない。(後略)」と述べている。また、石橋³⁾も、あそびを通した発達を重要視し、そこで不可欠な存在としてのおもちゃを挙げている。

このように、おもちゃについてその教育的意義を意識化して子どもに与えることには、少なからず批判的な風潮がある。これは、おもちゃによって何らかの教育的効果があったとしても、それは子どもがおもちゃで楽しむことによって生まれた副産物であり、教育的

効果を期待して子どもに提示するものはおもちゃとは一線を画したものである、と解釈することができる。その意味において、玩具と教具は対立項であり、幼児教育の中では両者に一線が引かれていることは事実であろう。

とはいえ、子どもの手に届くものを無意図的に全て与えることが、子どもの興味関心を満たし、なおかつ結果として教育的効果を内在することになるとは考え難い。保育所保育指針⁴⁾や幼稚園教育要領⁵⁾においても、子どもの発達段階の把握と、適切な環境設定の必要性については言及されており、一定の意識化された環境設定は必要不可欠であると考えられる。

このように、いわば理論的ダブルスタンダードがある中、保育実践の場においては、どのような意図を持って子どもにおもちゃを提供しているのだろうか。散見されるおもちゃに関する研究^{6) 7) 8)}においては、前提として前者を支持する論調があることから、わが国の幼児教育では倉橋像が未だ根底に存在することが窺い知れ、後者のような観点からおもちゃを検討した研究の蓄積は十分であるとは言い得ない。そこで本研究では、保育所において乳幼児に提供されているおもちゃについて検討することを通して、保

育士が乳幼児におもちゃを提供するに当たってどのような意識を持っているのかを明らかにすることを目的とする。

研究方法

H県内の私立S保育園を調査対象とする。事前に園長に調査の趣旨を説明後、各クラスの保育士への周知をお願いし、後日各クラスで準備しているおもちゃを全て提示してもらった。おもちゃは、許可を得てデジタルカメラで撮影し、クラス毎に分類した。また、おもちゃの定義は、子どもが手に持ってあそべるものとした。よって、ままごと用に設置してあるテーブルや室内用の滑り台、跳び箱等は対象とはしなかった。

分類に関しては、保育士がどのような意識を持っているのかを明らかにすることを目的とするため、子どもが実際にどのようなあそびをしているかではなく、予想されるあそび方を基に分類した。その際、おもちゃのデザイン上の特徴を検討した小杉ら⁹⁾の論に依拠し、分類上のカテゴリーを決定した(図1参照)。

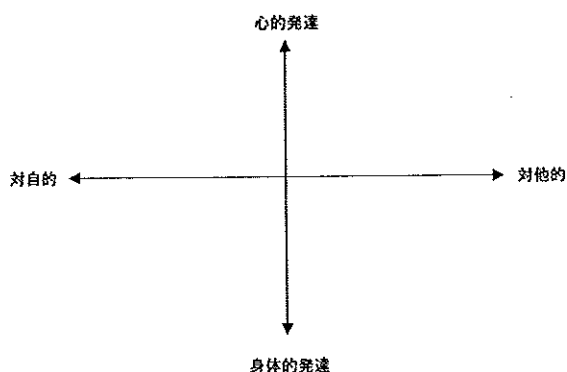


図1. おもちゃ分類のカテゴリー

また、研究者の恣意的な分類とならないよう、研究者に加え、同園の保育士2名にも分類を依頼し、一致する分類を採用することで客観性を図った。3者の一致率は88.6% (210種類中186種類)であり、異なる結果については3者で協議して決定した。

調査期間は、2008年7月から8月であった。

結果

各クラスにおけるおもちゃの種類数を表1に示す。3歳未満児では、各クラスにおもちゃが用意されてお

り、3歳以上児では、各クラスには最小限の設置のみで、共同のコーナーとしておもちゃのフロアが用意されていた。そのため、3歳以上児のおもちゃについては、概ね、コーナーのおもちゃを考察の対象とする。2歳児は2クラスあったが、おもちゃは同じものが準備されていた(重複してカウントせず)。また、ままごとの道具やぬいぐるみ等は用途が同じものは1種類と見なし(同一のものや色違いのもの等)、異なる用途のものについては別の種類として(鍋でも大きさが異なるもの等)カウントした。これらのおもちゃについて、図1の各象限に分類した結果を以下に示す(図2~図9参照)。

表1. S保育園にあるおもちゃの種類数

クラス	0歳児クラス	1歳児クラス	2歳児クラス	3歳児クラス
おもちゃの種類	52	42	36	12
クラス	4歳児クラス	5歳児クラス	3歳以上児のコーナー	
おもちゃの種類	4	3	61	

(種類)

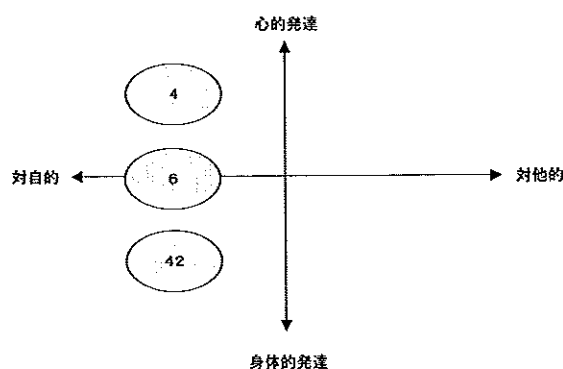


図2. 0歳児クラスのおもちゃの分類

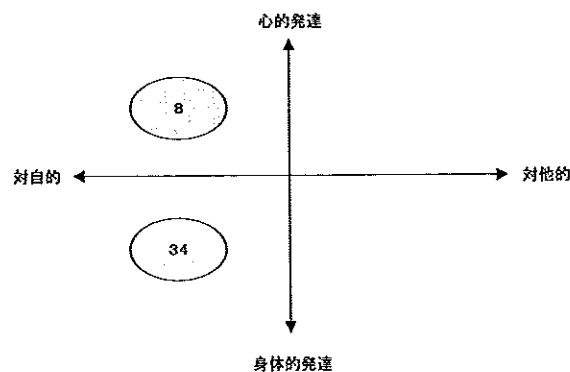


図3. 1歳児クラスのおもちゃの分類

保育所におけるおもちゃの意義

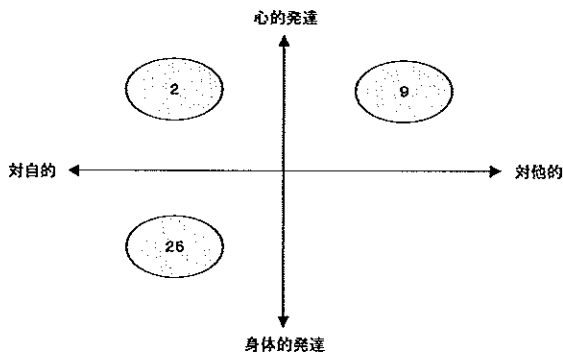


図4. 2歳児クラスのおもちゃの分類

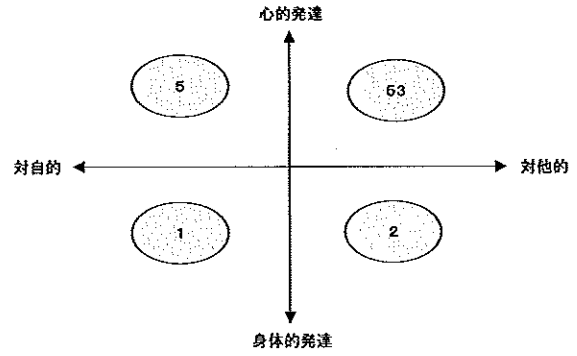


図8. あそびコーナーのおもちゃの分類

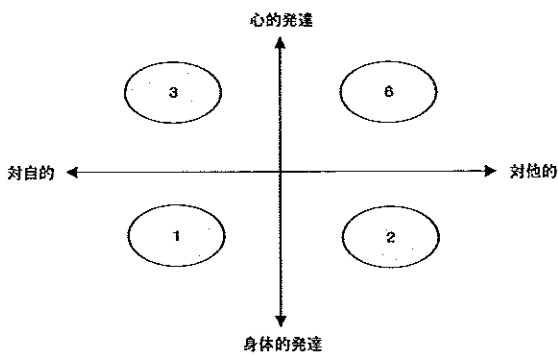


図5. 3歳児クラスのおもちゃの分類

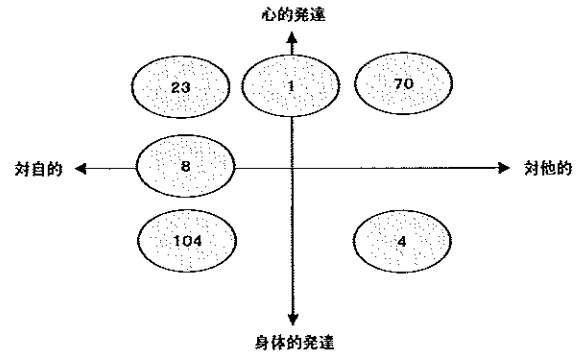


図9. S保育園全体のおもちゃの分類

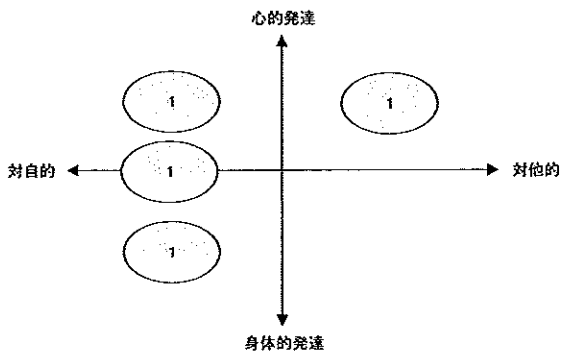


図6. 4歳児クラスのおもちゃの分類

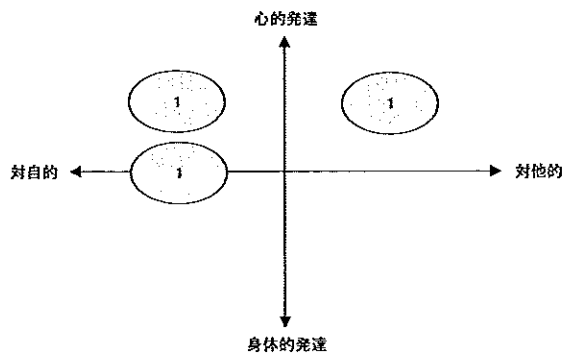


図7. 5歳児クラスのおもちゃの分類

0歳児～2歳児クラスまでは、第3象限に属するおもちゃが多かった。多くは、「つまむ」、「通す」、「合わせる」といった、目と手の協応運動を必要とする形状(図10参照)で、年齢によって大きさや必要とする力が異なるように配慮されていた。0歳児クラスの横軸上にあるおもちゃは「がらがら」や、すずが入ったお手玉等、保育士が振ってみせることもあれば、乳児が自ら音を出して楽しむこともあるものであり、乳児の月齢差による手の力に配慮された重さの異なるものが用意されていた(図11参照)。また、3歳未満児の第2象限にあるおもちゃは、ぬいぐるみや指人形である(図12参照)。2歳児から第1象限に属するおもちゃが出現し、3歳児クラスでは若干数が、3歳以上児のコーナーでは最も種類数が多くなっている。これは、ごっこあそびのためのおもちゃであり、ままごとやベビー人形、おんぶひも、子ども用のエプロンなどであった(図13参照)。4歳児、5歳児クラスでは、おもちゃとして特定の形状をしたものはなく、折り紙やお絵かきの用の紙、工作の材料などであった。

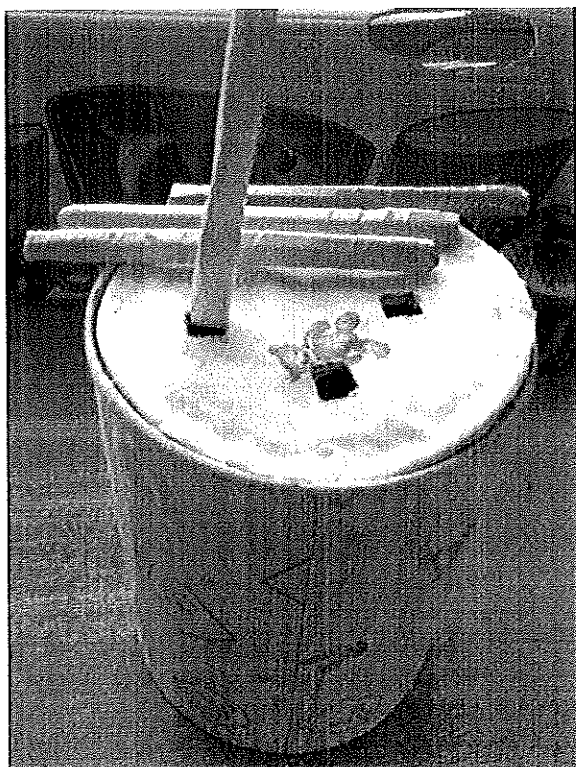


図 10. 型通し

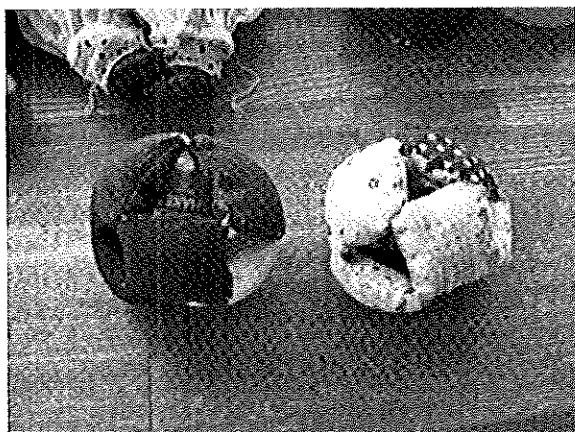


図 11. 乳児のがらがらお手玉



図 12. 手作り人形

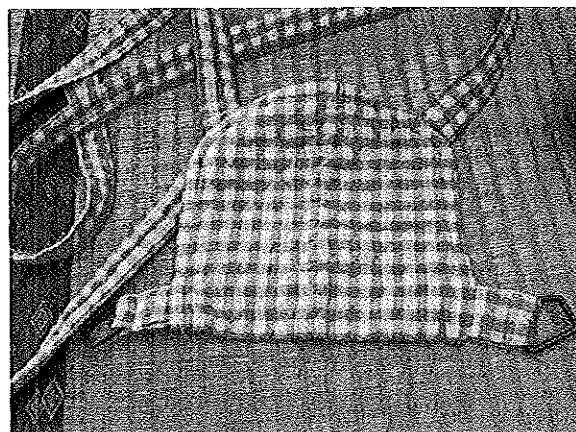


図 13. 子ども用おんぶひも

考 察

保育所におけるおもちゃについて、3歳未満児のおもちゃでは第3象限に属するものが多く、微細運動、その後の協応運動を促すようなおもちゃの提供の仕方であるといえる。また、年齢が高くなるにつれ、第一象限に属するおもちゃが多くなっていることで、象徴機能の発達に合わせ、見立てあそびを促進しようとする意図が見て取れる。さらに、年齢の移行に伴って、同一の用途のおもちゃでも、重さや大きさに差異を持たせていたり、前後の年齢のクラスと同一のおもちゃを準備することで、円滑なあそびの発展を図っていることが考えられる。これらから、保育士が乳幼児におもちゃを提供する際には、乳幼児の発達段階を考慮し、諸能力の次のステップを意図しておもちゃを選定していることが伺える。

しかし一方で、同一の用途と考えられるおもちゃであっても、その素材や、デザインは多岐に渡っており、乳幼児が自身の好みに合わせておもちゃを選択可能にしている点では、「楽しむ」ことについても決して軽々に捉えられてはいない。また、折り紙やお絵かき用の紙とは、手先の器用さや角を合わせる協応運動の促進といった教育的配慮も窺えながら、活動自体は幼児の主体性に任されるものであり、多種多様なあそびへの発展が内在している。

以上を踏まえると、明確な教育性は感じられるものの、その中で子どもが楽しめるような配慮がなされているのが、保育士が乳幼児におもちゃを提供する際に意図していることと捉えることができる。しかし、教

育性が見て取れる以上、子どもの成長・発達に即していることに対して肯定的であることは否めず、単に子どもが楽しむということだけでは、保育所内で乳幼児に提供するおもちゃには成り得ない可能性が示唆された。とはいえ、本研究では対象とした園が1園だけであり、妥当性に関しては推測の域を出るものではない。今後は、調査対象の拡大に加え、純粹に教育的意図を持つ教具や、子どもが楽しむことだけに焦点化されたおもちゃとの比較についても、検討しなければならないと考える。

謝 辞

本研究を行うにあたり、調査に協力いただいたS保育所と、2名の保育士の先生方にこの場をお借りして、お礼申し上げます。

文 献

- 1) 新村出編：広辞苑－第四版－。岩波書店。東京。388、1991
- 2) 倉橋惣三：玩具叢書。玩具教育編。序、雄山閣蔵版。東京、1935
- 3) 石橋尚子：おもちゃと幼児のイメージ力との関係。日本教育社会学会大会発表要旨集録。日本教育社会学会。42：116-117、1994
- 4) 厚生省：保育所保育指針。フレーベル館。1999
- 5) 文部省：幼稚園教育要領。フレーベル館。1999
- 6) 駒木根剛：児童文化の研究（2）－世界のおもちゃ文化について－。日本教育学会大会研究発表要項。日本教育学会。142-143。2003
- 7) 岸本美登里：子どもとおもちゃについての一考察。園田学園女子大学論文集。園田学園女子大学。18：105-117。1983
- 8) 吉良創編著：シュタイナー教育－おもちゃとあそび－。株式会社学習研究社。東京。2001
- 9) 小杉ももこ、野口尚孝：こどもの個性を伸ばす遊びのデザインに関する研究。研究発表大会概要集。日本デザイン学会。49：140-141、2002

Research on the Meaning of “Toy” in Childcare Centers —Examination of the Age of Children and Toy Shapes—

Masao Uemura

<Abstract>

“Toys” exist only so that children may enjoy them. “Toys” are given by the child the education. “Toys” with various values exist in childcare centers in Japan. But, there is a rumor that it is not good to give toys for education. Therefore, the childcare giver offers toys to children with some intentions. The purpose of this research classified the toys in childcare centers by age, and examined the child care givers' intentions for the toys.

As a result, the toys that promoted physical development were offered to a lower age of child by childcare givers. And the toys that promoted more symbolical play were offered to higher age by childcare givers.

In a word, the childcare givers offered the toys with the intention of promoting children's growth development. Moreover, the childcare givers were considering it so that the children might enjoy playing by making a variety of toys.

Key words: Toy, Children, Childcare giver, Childcare center, Environment